

- 単元名 詩を読もう (ひばりのす、夕日がせなかをおしてくる)
- 本時のねらい 感動をどのように表現したらよいかを気づかせ、自分の体や心で、どうとらえ、生き生きと素直に表現させるか
教材文を通して考えさせる。
○「夕日がせなかをおしてくる」は、情景をどのように書き表わしているか指摘することができる。
○「ぞうきん」という題で、情景や心情をとらえ、生き生きとした言葉で表現することができる。

3. 指導過程

段階	具体目標	学習活動・内容	時間	評価	指導上の留意点
とらえる	○教材文を、声の大きさ、声のはやし、間のとり方を工夫して読むことができる ○一人一人が本時の課題をとらえることができる	1. 前時の復習をし、本時の課題を知る。 (1) 「ひばりのす」を、情景を思いうかべながら音読する。 (2) 「夕日がせなかをおしてくる」を、情景を思いうかべながら音読する。 (3) 本時の課題をとらえる。 読む人の心に強く残る詩は、どんな気持ちで書いたら良いか考えて詩を書いてみよう。	(7)	○声の大きさ、声のはやし、間のとり方を考えながら音読できたか。 ○ B の段階の児童を1名指名読みさせる ○ 聴手は、詩の読み方のカードを基に、友達の音読を評価させる。 ○ 本時の課題が一人一人に分ったか。 ○ 課題を読み確認させる。	○前時の学習を想起させて、本時との関連をはかりながら、学習事項と本時のめあてを確かめさせる。 ○ 「夕日がせなかをおしてくる」は、夕日がほくらによびかけ、又それに答えている情景を頭に浮かべながら音読させる。 ○ 本時のめあてを、しっかりとらえさせたい。 ○ B、C 段階の児童を指名し、課題の把握状況を確認する。
つきつめる	○詩の表現の仕方を教材文を通してとらえることができる。	2. 感動が、どう表現されているか確かめ、どう表現したら良いか考える (1) 教材文を読んで話し合う。 ① 「夕日がせなかをおしてくる」について 太陽と子供の間には、どのような気持ちか、どのような言葉で表現されているか。 ② 詩をかく時にはどのようなことに目をむけたら良いか。		○教材文から詩の形式、リズム、音の響きなどわかったか。 ○詩をつくる時、どんなところに気をつけたら良いか。	○様子や言動を素直に書くことによって、感動がいきいきと伝わっていくことを理解させたい。 ○ 児童が気づいたことを発表させる ○ 発表を板書し、整理する。 ○ 太陽→子供、子供→太陽に対し素直に表現されていることに気づかせる。 ○ 詩の教材文を通し、素直に表現しようとする意欲を高めていき、「自分も自由にかいていける」という意欲を高めていきたい。

- を通し詩と作文のちがいを理解させる。
- 声の高低・速さ・間のとり方の学習から情感のこもった詩をつくることができるようにする。
- 詩を書く糧にするため、教科書や図書館の本より感動のある言葉あつめをする。それによって自分の気持ちを表現する言葉を豊富にする指導をする。
- (二) 研究内容と方法(二)の実践概要について
 - ① 素材の観察の仕方
理科・体育・図工との合科的指導を試みた。
 - 理科の授業においては、雲・風の動き、ヘチマののびゆく姿、四季の移り変わりの様子等を五感を通して観察させる。
 - 体育科では、運動の様子や児童の動き等を通して心の動きを取材させる。
 - 図工科では、心の叫びを絵や工作に表し、その表現したものから自己の感動を意識化させる。
 - このようにして、国語と他の教科の連携を図りながら、詩をつくる素材を多面的にとらえる力を育ててきた。
 - ② 表現の工夫
詩の表現として、いくつかの素材を羅列するだけでは、詩にならない。そのために、次の四つの観点で推敲し表現の工夫を試みた。

(三) 研究内容と方法(三)の実践概要につ

- 推敲の観点
 - ・ 感動が素直な言葉で生き生きと表現されているか考えられることができる。
 - ・ 行動や様子が目に浮かぶように書かれているかどうか考えることができる。
 - ・ むだ、書き足りない言葉を考えることができる。
 - ・ 行がえや句読点の打ち方を考えることができる。
 - これらをもとに、左記のような手順で自作品を推敲し、どうすれば自分の気持ちをより良く表現できるか考えさせた。
- 推敲指導段階
 - ・ 取材した物を詩的作文に書く。
 - ・ 四つの観点から推敲する。
 - ・ 音声化する。
 - ・ 音声化により、リズム・間・響きを考える。
 - ・ 感動をより豊かに表現する。
 - ・ 作品として仕上げる。